

平成 30 年度 第 2 回北関東救急看護研究会

発表概要

テーマ： PICS 予防における高度実践看護としての取り組みと今後の課題

話題提供者

所属：自治医科大学附属病院

氏名：阿久津 美代

集中治療後症候群 postintensive care syndrome (PICS) とは、アメリカ集中治療医学会において、ICU 在室中あるいは ICU 退室後、さらには退院後に生じる運動機能、認知機能、精神の障害であると定義されている。アメリカでの調査によれば、集中治療をうける患者の 50~70%が PICS を発症すると報告されており、ICU 滞在期間が 2 日間でも発症し得るとされている。医学の進歩によって患者の救命率は上昇し、医薬品の開発により、難治性疾患患者の長期予後も改善されてきている。超高齢化社会に突入する日本において、今後 PICS を発症する患者が、比例してくるのは想像に難くない。

PICS による障害は、患者の長期的なアウトカムに影響を及ぼすだけでなく、医療費の増加といった事態にも関連してくる。PICS 予防は集中治療領域だけの問題ではなく、医療全体で取りくまなければならない課題であると考ええる。

現在 PICS 予防に関する研究は多数行われ、新たな知見とエビデンスの蓄積がされつつある。PICS 予防は、単独の予防策で成立するものではなく、様々な観点からの対応が必要である。具体的な対策としては、ABCDEFGH バンドルの実践などが挙げられるが、より効果的にバンドルを回すためには、多職種での連携が鍵になる。多職種による専門分野からの知識と視点から包括的に関わり、患者、家族を含めた医療チームで取り組むことが、PICS 予防に重要ではないかと考える。

多職種連携は、様々な幅広い観点をもつ専門家がチームとして連携するからこそ、そこに価値の対立が生じる場合も少なくない。高度実践看護として、患者とその家族にとって最高のアウトカムをもたらすための課題の一つは、多職種との連携、コーディネーション、ビジョンの共有であると考ええる。多職種連携のシステムの構築がなされることが理想の最終形態であるが、そこにたどり着くためには、高度実践看護として取り組むべき課題は多い。